

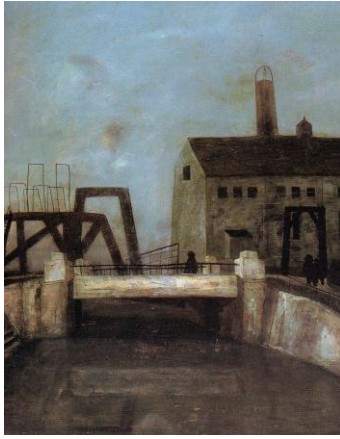
松本俊介展を観て 早田美智子

昨年の暮れ、世田谷美術館で「松本俊介展」を観た。昭和二三年に三六歳で他界している「天折の画家だ。『画面に湛えられた澄み切り痛みのほどの詩情』と主催者の挨拶文にあったが、その言葉通り、透明感のある画面は圧倒的で、ため息が出た。

モチーフは建物であったり橋であったり運河であったりだが、それは歴史あるヨーロッパの街ではない。おそらくは雑然とした昭和初期の東京近郊の風景だ。ゴッティとした街が絵になると誰が思うだろう。画家を目指した多くの若者はパリに渡りその腕を磨いたのではなかったか。でも彼は日本を離れなかった。どうということのない街と、どうということのない普通の人たちが「松本俊介」という若者を通して絵の中に立ち上がっていく。静かであるで物語の始まりそうな画面だけれど、それらが描かれた当時、現実の街は喧騒でのびきならぬ「戦争」に覆われていたはずだ。戦争画を強要されたとき「自分の中にあるものしか描けない」と拒否し、ひたすら街のスケッチをしていたという。

戦災の前に描かれた端正なY市の橋と空襲後に描かれた同じ場所の「Y市の橋」がある。破壊されひん曲がった鉄橋が荒々しいタッチで描かれている意味は言わずもがなだろう。凶録を見直して、涙が溢れ出た。

私が松本俊介の絵を、初めて「意識して」見たのは十三年前だった。桐生の大川美術館だったが、そこで出会った「ニコライ堂」の何と寂しげだったことか。最初の印象はそんな感じだった。でも作品から離れられず、行ったり来たりを何度も繰り返した記憶がある。十三年前とはつきり確認できるのは、その時に



見た「ニコライ堂」に魅了され、大胆にもその翌年の新日美展に三〇号の「ニコライ堂」を出展しているせいである。

改装され綺麗になってしまったニコライ堂は随分趣が違っていたけれど、同じ位置だろう場所からスケッチをし、人物のシルエットまで添えた。新日美の審査員をされていた栗津先生(故栗津清隆氏)の絵画教室で油絵を習い始め、また四年目だったか。今考えると冷汗ものだが、幸いなことに、私の絵など誰も覚えていない。

最後に大川美術館を紹介しておこう。桐生出身の大川栄二氏(元ダイエー副社長)が松本俊介に惚れ込み四〇年かけて蒐集したコレクションが並ぶ。小品が主だけれどその所蔵品は六五〇〇点という。俊介が影響を受けた画家、影響を与えた画家同時代の仲間等々。松本俊介には熱狂的なファンが多いそう。私もそのしっぽの方に加われたら嬉しいが、自分の作品のことを思い出し途端に、この原稿が書けなくなっただけ加えておきたい。

気が付けば魔女 富岡ネム

気が付けば、年末年始の恒例行事があわただしく過ぎ、既に今年も一か月が何とせず過去のものになってしまった。このままだとやはり一年間何もせず終わってしまう。それでもまた年の初め、何とか情性に満ちた日々を断ち切りたくて反省を込めて少しだけ考えた。少しだけ。こじつけがましいけれど。

その一 創作意欲の減少を加齢のせいにして自分がある。

若い頃は真夜中にもアイデアが浮かぶと飛びたつ湧き出すと次から次へと奇怪とも思える発想にまで飛び火する。かつて何となく経験したあの身震いするような、心身を稲妻が突き抜けるような感覚は今でも懐かしく確かな事実として思い出せる。そして不思議なことに何十年経った今でもあの時代の作品は原点となつて、核となつて鎮座しているから困ったものである。いつまで青春を引きずっているのか、進歩しないまま醜い魔女に変容した気分である。目が、腰が……

その二 現在かつては想像すら出来なかった地球規模の激変に戸惑う魔女。つまり激動する社会

に対応できない不安からくる揺らぐ足元。

あれは寺山修司や暗黒舞踏、アングラ劇場が流行った頃だった。自立の芸術か参加の芸術かと朝日ジャーナルを小脇に挟んで口頭泡を吹く議論の末、あつたという間に学生運動の波に呑まれて気が付けば路端に立つノンポリの自分。参加の芸術とは社会と密接に関わる芸術活動をいう。若さが孤立を選び銀座、新宿、渋谷の雑踏に豆まきよろしく散文的に出没しては、また想像力を駆使して自己中心的発想を展開し散文にまとめる、といった具合で表現の方法は絵でも、文章でも、身体表現でもよかつた。それが可能で周辺社会もそれを許した時代だった。要するに国全体が若かつた。

けれど今は違う。食欲な人間の欲望を英知という言葉にすり替えて極めたところに出てくるのが巨大な自然の報復であり、世界各地で多発する紛争やテロリストの横行となる。ならば平和的と言われる先進諸国でさえ先行き不透明な閉塞感に満ちているように思われる。何が起ころうと対岸の火ではない社会情勢に迫り込まれている。その中に老いた自分があるのである。落ち着かない日々を最低家族だけは守りたいと考えるが、慎重に、慎重に……

その三 低迷する魔女に関係なく歓声を上げながら走り回る子供達。

昨年十二月二十三日、八歳の男児の孫がたった一人でシドニーから祖母である我が家へ一か月半の滞在をやつてきた。パスポートをもって区役所で転入届を済ませると国民健康保険への加入や当該小学校への編入手続きも自動的に行われる。四年前やはり次女一家三人がこの時期にやつてきた時、短期間だからと転入手続きを怠つたため、子供二人がインフルエンザに罹つてたつた一回の診療代に八万円取られたことがあつた。真夏のシドニーから真冬の東京に来たとたん、今年も溶連菌による喉の腫れで高熱を出したが、完治するまで全て無料になった。

有難いものだ。すぐ近くに五年前やはり日本に移住を決めたイギリスの長女一家五人が住んでいる。その孫三人(女一、男二)とやつてきた孫、いとこ同士は毎日一緒に学校に行き、クラスも同じで机を並べている。毎年暮れから二月初旬まではクリスマス、正月、誕生日(四人が

この時期に集中)、進級進学と出費の総攻撃にあう。そこには嘆きの魔女の姿が……結局雑巾のように扱き使われ捨てられる運命か。

その四 気分は乗転、ずつこけ魔女 いやいやそこは魔女力、美味しい餌をつつたかと思えば、恐いおまじないの話、次には世にも優しい声で絵本の世界へいざなつて。男児三人集まれば取組み合いの喧嘩や知る限りの背伸びした罵詈雑言の応酬が繰り返される(そこに英語が飛び交うから面白い)、結局一番下の幼稚園児が泣くか、魔女が年一回の啖呵や見得を切つて場を治める。みんなの若さを貰つて得した気分になる

もつと 得した気分になるのはこの数年子共の成長とインターネットの普及だ。パソコンは言うに及ばずアイパッド・アイポッド・スマートフォン・各ゲーム機器やタブレットの急激な普及で小さい子供ほど扱い能力に長けて波及のスピードに難なく乗れる。レストランや買い物中に騒ぐ子を黙らせるのはこれが一番だ。寝食を忘れるほどの魅力が詰まっている魔物に思える。そこで魔女の孤剣に賭けて勝負を挑むのだがいくら説明されても分からない。なんでも聞くのでとうとう子供たちに愛想尽かしされるのだが、それでも少しづつ生活の中のネットの常用化は否めない。来週には我が家もスマートテレビに変わる。子供達に囲まれて思う。

急激に変化する世界を相手にチャンスを見逃すな!

グロバリーダーの心を持って!と。(コピーを飲みながら無責任な魔女)

それは紛れもなく豊かな想像力と創造力の賜物だ。今更昔には戻れない。しかし壊れゆくかに見える現在でも知恵と勇気を持って乗り切らなければもう後がないことも大方は知つている。

こは若者に席を譲ろう、そして孤高の魔女になろう! 腑に落ちたところで東京支部便りが届いた。あれ、大石支部長のデータラメ節が載つてるよ。「もつと気楽に、データラメ半分、マジメ半分、ユツクリ、ノンビリ楽しんで絵を描きましょう」